

外の陸軍少年兵学校の校舎は知らないのですが、弘前の歩兵連隊や野砲連隊のように営門をくぐれば衛兵所があり、衛兵所の陰の方に営倉もあった。校舎から百米ほど離れた隅に土塁に囲まれた火薬庫もあった。

衛兵所には、たすきをかけた週番将校が指揮を執っていて、生徒が門の出入りをする時は、引率者が、「歩調とれっ」と号令をかけて、挙手の礼をしながら通過する。

奈良の冬は寒い。雪は降らないが、水での洗濯などで手が凍傷にかかってしまった。早く若草山が青くなればよいと思った。

入学して六ヶ月過ぎ、五月一日付で上等兵となりこの日から「生徒」の呼称が「飛行兵」となった。「山中飛行兵、厠へ行って参ります。」という具合に。一応兵隊の仲間入りというところか。

毎日の行動も、机上の勉強から実習の時間が多くなった。飛行機の整備に手をかけはじめた。教官は教室での将校の講義と違って、実地に経験を積んだ下士官（曹長か軍曹）である。五、六名一組に、教官一名がついて、内然機関（空冷エンジン）の解体、組立て、電気系統の配線等本格的な整備の実習に入った。

与えられた紙数も尽きたので、後は在籍中の概要を記して詳細は次の機会にしたいと思う。

奈良には、名前ばかりの飛行場（原野に格納庫が建てられてある）でそこには飛行機が無かった。飛行場に甘薯（さつまいも）を植えに行っていたこともある。

春日山の原始林に、九八式偵察機が七機隠されていた。その機の警備

のため、一ヶ月に二回（二時間の交代勤務）歩哨に立たされた。

七月に入って、B 29の大阪空襲は、生駒山脈の向う側の大阪市街の火の手はまるで、不謹慎な言い方だが花火大会でも見ているような美しさであった。そのころ、天理市にある海軍の飛行基地から、数十機の敵戦闘機グラマンの迎撃に海軍の戦闘機三機が飛び立ち空中戦を演じたが、我方一機が撃墜され、グラマンも二機ほど煙を吐きながら大阪方面へ逃げ去ったの手に汗を握りながらこの目で見た。

八月に入って転属命令が出て、第二中隊第五班もバラバラになった。私は千葉県下志津飛行学校へ、鎌田禮三飛行兵は浜松飛行学校へと分れた。我々は下志津へ行く途中行路変更となり、栃木県雀の宮駅に下車して今市方面へ行進し、ある丘陵地帯の仮兵舎へ入った。そこには百式偵察機が数十機駐機されていた。

八月五日に命令が出て、われわれ奈良教育隊からの分隊は、十八日朝鮮大邱飛行場への転出が決った。第一陣の特別幹部候補生の飛行兵は十二日に出陣し、われわれはその後に続く筈であった。

八月十五日の聞きとれない玉音放送に涙を流し、終戦直後は心の空洞を満たし切れず、周辺の村落を団体で唯走り廻った。

二十五日部隊の解散式の後、新しい軍足に米一升を詰め、毛布一枚、冬の外とうを貰い、どこの駅から乗ったか覚えていないが、満員の貨車にもぐり込み、二昼夜ほどかけて（その間乾パンを噛り、水筒の水をのどを潤おし）青森の浦町駅へ着えた。青森市は見渡す限り焼け野原で、唯一つどうして焼け残ったのか蓮華寺の屋根だけが強く目に写った。

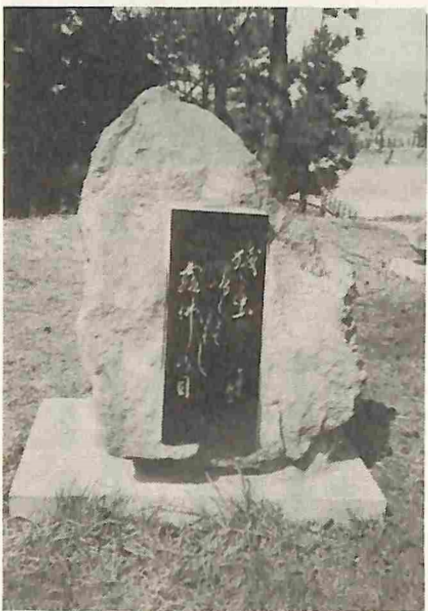
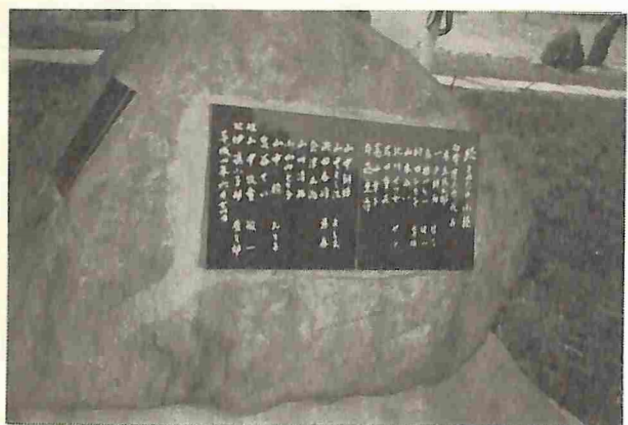
また何時間かかけて故郷の嘉瀬の駅へ下りたが、この村は一年前と少しも変わっておらず、この一年足らずの期間だったが、夢のように思えた。

## 続・きぬたの小径

### 句碑建立

#### 沢田一歩

昭和六十一年の、かたりべ、第五集に「碇句碑への道程」と題し、金木町の俳人二五名の句碑を顔写真入りで紹介させてもらったが、その後平成四年、新しく金木俳句会員になった人や、今は亡き俳人の遺族から等の強い要望もあり、木立民五郎氏の心良い承諾と沢田政孝氏の努力により、同じ嘉瀬の観音山に「続きぬたの小径」として、十九基の句碑を追加建立したところ、編集者山中正津より本号に追加句碑の事も書くよう要請がありましたので以下に列挙致します。顔写真は省きます。順不同です。



#### ◎残る虫鳴くとてほそし露仏の目

雅号 一戸耕雨（哲三）

住所

職業及年齢 僧侶、雲祥寺前任職 七十六才

俳歴

十五才より父木人より俳句を学ぶ。加藤紫舟主宰「黎明」入会。その間秋谷佳村主催の湖吟社に寄り、戦後北天句会を主催。水車「選者。現在「俳句くろいし」の選評担当。金木俳句会代表。

◎辛夷咲き永遠に鎮まる句碑の丘



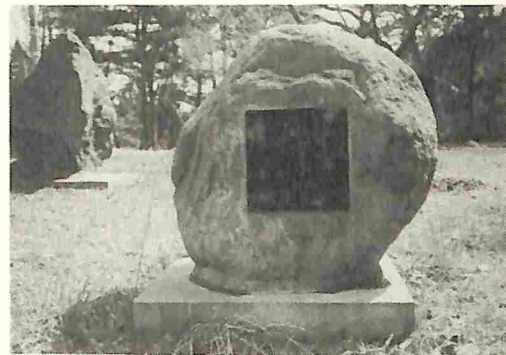
雅号 沢田月歩（繁市）  
住所  
職業及年齢 農業、七十二才  
俳歴 戦前昭和十八年「鳴子」時代から作句、現金木俳句会々員。

◎恐竜の来る息づかい水芭蕉



雅号 高橋けん一（健一）  
住所  
職業及年齢 木材会社々員、六十九才  
俳歴 平成元年金木俳句会入会して活躍中です。

◎札幌ばし秋刀魚の青さ買ひにけり



雅号 会津正治（正治）  
住所  
職業及年齢 昭和六十一年五所川原南小学校長で定年退職、六十九才  
俳歴 鬼灯、砧会員を経て、現在板柳俳句会、暖鳥、万緑で活躍中です。

◎玻璃越しに蜂さまよへり抜歯器具



雅号 山内清祐（小山内嘉工門）  
住所  
職業及年齢 僧侶、八十一才  
俳歴 砧吟社の客員より五所川原俳句会、万緑で活躍中です。

◎豊の秋ここの村人のよき会釈



雅号 村田ひでお（秀雄）  
住所  
職業及年齢 昭和六十三年嘉瀬小学校教頭で定年退職、六十八才  
俳歴 退職後金木俳句会に入り活躍中です。

◎草紅葉地蔵に眉のなかりけり



雅号 北川せつ女（セツ）  
住所  
職業及年齢 書店営業、六十八才  
俳歴 昭和六十二年金木俳句会に入会「たかな」会員ともなり活躍中です。

◎淡墨の筆おほらかに山笑う



雅号 山本れい（れい）  
住所  
職業及年齢 昭和六十年中里小学校教諭で定年退職、六十八才  
俳歴 平成二年金木俳句会に入会、他に短歌も作り活躍中です。

◎ローカル線遮断機月を指したまま



雅号 山中よし江（よしえ）  
住所  
職業及年齢 主婦、六十八才  
俳歴 昭和六十二年金木俳句会に入会活躍中です。

◎鳥渡る遠嶺は彩を重ねけり



雅号 葛西幸子(幸子)  
住所

職業及年齢 平成四年金木第一保育所を定年退職、六十四才  
俳歴 平成二年金木俳句会に入会、他五所川原俳句会、万緑等でも活躍中です。

◎妻逝きて三十史や花の墓に老ゆ



雅号 齊藤重清(重清)  
住所

職業及年齢 理髪業、七十七才  
俳歴 戦前昭和十八年「鳴子」に齊藤呑竜の名で参加、その後句作を止めている。

◎観音山句碑の小路に花万朶



雅号 山中朝輝(朝輝)  
住所

職業及年齢 建設業、六十八才  
俳歴 戦前昭和十八年「鳴子」に山中雲峰の名で参加、その後句作を止めている。

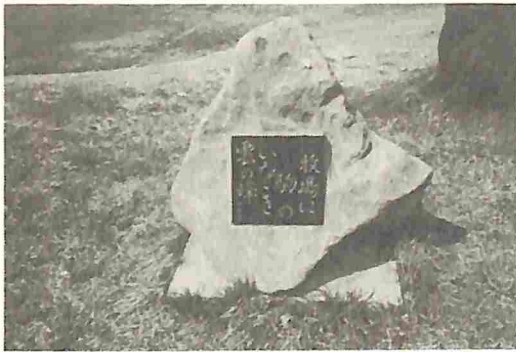
◎色もなく鳥もなかざる冬木立



雅号 浜田春嶺(君春)  
住所

職業及年齢 昭和五十五年喜良市小学校教頭で定年退職、七十五才  
俳歴 無し

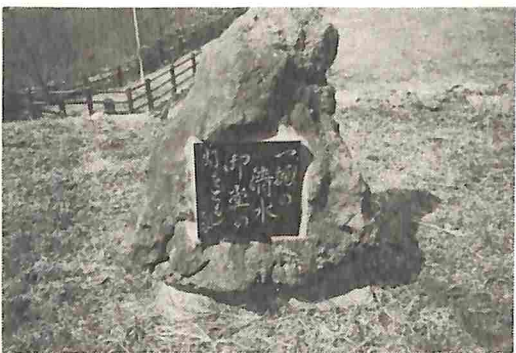
◎牧場に駒のいななき雲の峰



雅号 山中みさを(操)  
住所

職業及年齢 農業、六十七才  
俳歴 昭和二十六年より『砦』発刊より山中みさを名で参加、現在句作を止めている。

◎一掬の清水御堂の灯をともし



雅号 泉谷てい女(てい)  
住所

職業及年齢 商業、七十六才  
俳歴 町民金木俳句大会に入賞あり他俳歴なし、川柳も作って活躍している。

◎人声に人影見えず夏木立



雅号 岩田しげみ(重美)  
住所

職業及年齢 なし、七十九才  
俳歴 平成二年金木俳句会入会他短歌、川柳も作って活躍中です。

◎満天の虫がかなでるセレナーデ



雅号 小山内トモ子(トモ子)  
住所

職業及年齢 ホームヘルパー、四十九才  
俳歴 なし

◎初とりや背戸の陽筋にひたりいる



雅号 山中牧童(敏一)

住所

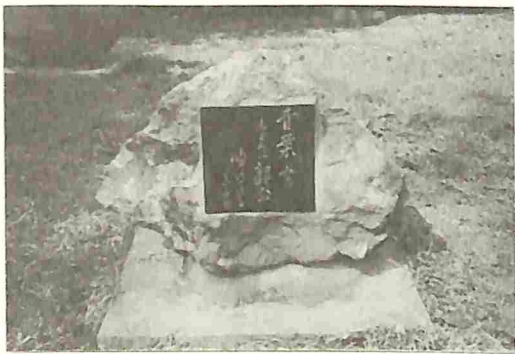
職業及年齢

昭和四十一年蒔田小学校  
教頭で定年退職後、商業  
に従事、平成元年死亡、  
享年 八十二才。

俳歴

なし

◎青葉みちもどれば郭公啼いている



雅号 伊藤小子部(慶三郎)

住所

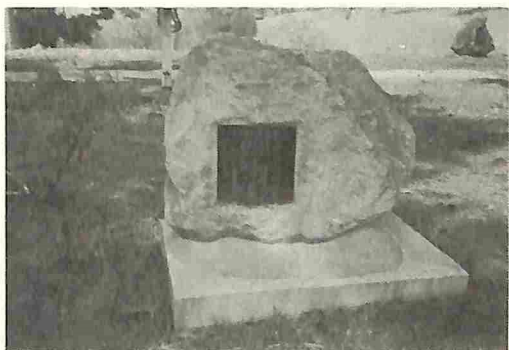
職業及年齢

昭和十六年  
嘉瀬小学校々長で定年退  
職、昭和三十六年死亡、  
享年 七十三才。

俳歴

なし

尚、木立民五郎氏全面的な御協力に対し感謝の意を表するため句碑用の石を一基寄贈し詩文を左記に書いて頂き建立した。



南の空に岩木の山を眺め

北方遙かに権現の崎を

望む、ここ立山は嘉瀬

文人憩の丘

木立民五郎

### 会員募集

ふるさとを探る会では、嘉瀬の歴史を探り、調査記録し、次代に遺していくことを目的に活動しています。

同好の士を募集しています。

お問い合わせは 電話五二二八二番へ。

ふるさとを探る会

## 特別寄贈

# 川柳にとりつかれて

私が川柳と出会ったのは五年前今では私の脳の半分は川柳でしめられているといっても過言ではない。

昨年五月逝去された花田一氏によって川柳講座が開かれた。俳句会や、短歌会は古くからあり金木町にも川柳を植えたという念から北野岸柳氏を講師に約一年半ばかり私達は手ほどきを受けることになったのです。又、五所川原岩木吟社の代表菊地ふみをさんにも指導の協力をしてもらい、どうやらさまになってきたという感じですが。

花田氏と岸柳氏の父親が若い頃に、同じ学校で教鞭をとっていたという縁で私達にとっては大へん幸運なことであったのです。

明けても暮れても川柳ということにはいかず農業をする私は畑や田んぼに行くときもメモ帳をポケットに持ち歩くようにして、いつでも、きずいたこと、ひらめたことはすぐメモをしなければ忘れてしまいます。農家に嫁いで三十数年世の中は変わったといっても まだまだ津軽特有の農家の家風がいつも私を支配しておりました。

そんな中から私の川柳は生れており句の中に男と女、父と母をそして自分の思いを五七五に綴ることが出来ればと思っています。

母いつもなにか縫ってた夜なべの灯

恍惚もなみだも梳いた母の櫛

幼い頃みた母の背家族が寝しすまった居間の裸電気の下で母はいつも縫いものをしていた。そして母の鏡台の引きだしに入っていた櫛。母も女、妻ゆえ涙したときも梳いたであろう。

雪原野風がなぞれば父の顔

汗しみた父がはなさぬ腰手拭い

南黒地区(温湯)から嫁いだ私にとって金木地区の冬の寒さは大へん厳しい。中でも平成五年は大凶作に見まわれ男達は寒さに身をさらし雪原にたつて土木作業に雇われた。

特にこの冬は地吹雪がすごかったです。

その時に生れた句です。その翌年は大豊作となり暑い暑い夏で、私達がまだ経験したことのないような夏で各地で水不足になった年です。

午前二時男の嘘が太り出す

まなざしの奥で男の骨を抜き

首ひとつ男は人生ぶらさげる

生きざまを洗う男に冬の雨

じつくりと男を料理して見ましたら出た句です。私は農をするもの、

やはり労働の中から生れるものが多いです。

したたかに生きた農夫の力こぶ

よわねなど吐かぬ男の太い眉

黄金波信じて父は泥を掻く

天職を誓う野良着の汗洗う

ひと握りの土さえ迷う嫁の地位

北国の冬の訪れは早く一年のうち五ヶ月は雪とつきあわなくてはならず、春も又遅い。

まだ燃える命をつつむ雪になる

冬の灯が暮らしに溶けるにこり酒

雪に慣れゆきに埋れて過疎暮れる

望みまだ捨て切れぬ道雪明り

女をテーマにするということは、妻、娘、母、おんな、とても広い分野である。そしてまた私の人生の中を晒けだすことでもあり、女としての願望でもある、自分がなしえないことを句によって女をつくる楽しみがあるのです。

確かめて握ったはずの愛こぼれ

身の上を語る女の重い口

さりげない誘いにのって拾う罪

修羅場ふむ女の足が細すぎる

ほたる火を抱いた女の白い足袋

落椿断たねばならぬ絆かも

しがらみがこんなに重い荷を担ぐ

たたねばと思うしがらみまだ断てず

句をつくることによって楽しさと明日への夢がひろがることに私の人生に潤いをみいだしました。

平成八年三月二十九日

### 津軽弁、嘉瀬の小話集

#### (7) 「ムンツケラ」はない

村の中学生たちが、東京へ修学旅行に行きました。上野駅近くの稲穂旅館で一夜を過ごした生徒たちは、早朝観光バスで都内見学というので、玄関前に集まった。と、深見ユキが「あっ」と叫んだ。二階の部屋に、ハンドバックに入れた財布を忘れてきたのです。

「女中さん、部屋サ、忘れ物してきたんじ。すみませんけど、ハンドバック、ムンツケラ、持ってきてケレ」と頼んだ。

女中は小走りに階段を上っていき、しばらくして青ざめた顔で降りてくるなり、

「ハンドバックはありませんが、ムンツケラはいくら捜しても、ありません」

#### (8) 「団扇」と「器」

今年六月、村の中学校生徒たちが、東京方面へ修学旅行に行きました。た。

旅館の二階はとても暑く、生徒たちは女中さんに

「うつわコ、貸してケレ」と頼みました。

女中さんが「ハイッ」と持ってきたのは、大きなどんぶりでした。

生徒たち、顔を見合わせ、「コレ、ナニスンダベ」とアツケラポン

(木村)

## 自称山猿遭難顛末記

須崎正敏

山の猿です。山から下りて来た猿ですと自から自分にも云え聞かせている私です。

小学校を卒業して山の仕事に出てから結局は生涯山での生活で終ることになる。

職場は国有林で、『小田川担当区』内での造林保育の作業である。当時の『主任』山のダンナ様と云った。人は歴代第十八代。『昭和十一年』昭和十五年』鈴木彦三郎さん。それから数えて歴代第三十代目、「昭和五十九年」蒔苗猛次さんまで息の長い山での年月であった。

「日雇作業員」から「月雇作業員」に念願だった「定期作業員」になる。その間安全委員も何度か務め、警察署と営林署との合同避難訓練にも参加もし、また実際山に迷い込んだ人を探すのに警察署の方を案内したことも二度あった。

山好きの弟が近年山には足を向けず海釣りにばかり凝っているのだが或る日家に舞茸を持って来てくれた。今年は山のキノコも豊作であるとのこと。それでは私も、その日は稲の朝仕事を終ってから、家内は忙しいから山行きに反対したのだが私はこの時期を逃してはならじと舞茸採りに出ることに決めた。

自分で『にぎり飯』を作り時計の針はもう十時を廻っている。山に入るのに飯詰からの青五線か、または喜良市からの鹿の子線通りにするか思い迷ったが近い方の鹿の子線に決めた。

出発時はもう十一時である。この日の装備はにぎり飯三コ「三食分」、「タバコ二箱」タバコは露や雨で濡れるから「ライター四コ」、蚊取線香吊り下容器で「一コ」、「鉈」、刃渡り三十センチの「手鋸」、ロープはサワグルミの枝や小木の皮で作れるので、不用、台風二十六号の北上で『降雹』があるかも知れないとの予報で冬物の肌着も着る、合羽ズボン持つことにした。

途中落葉を拾ったりして郡界に着く、車の前後に車止めをして山に入るのだがこの道十五年も二十年近くもなるか、自衛隊が昔からの郡界歩道より楽に歩ける新しい歩道を造設した、この歩道は遊歩道としても利用出来る。この道に入るや正午のサイレンを耳にする。

まだ多々良沢で営林署で云う二十林班である。その場で昼食にする。クサギの綺麗な結実を見て秋だなあーと季節を感じる。この「クサギ」の生えるところ「スギ」植林の指標木であることを想い出す。昼食十五分南を目指して前を進める。

小田川担当区域は北は鹿の子の高橋沢から南は東嘉瀬山、水ヶ沢の「魔の岳」指標四百七十四米、この山は小田川の源になるこの頂上青森・五所川原・金木・三ツの境界になる。また金木営林署の第一林班はこの地から始まる。この山の下「空沼」青五線から鹿の子迄七キロと記憶している。小田川山に縦横に走る歩道は三十八線あって一番長い歩道で八キロある。

鹿の子から空沼迄の中間ぐらゐの目的地だから大変な距離ではない。この地にはここ十年ぐらゐ歩いていない。山の様子は十年前とかなり変っているが途中を懐かしみながら目的地に着く。青森営林署の『白滝の沢』である。この沢の源は奥内の岳で源八森指標三百五十三米、三角点のある山を竝んでいる。目的の舞茸木は十三林班、猫右エ門沢あたりになる。舞茸木は「コナラ」の大木で数米はなれて二本ならんでいる。二本とも生えないのか、または採られたものか今日の舞茸採りは空振りである。舞茸採りは絶対足跡を残さない。その木まで行くのにわざわざ遠廻りして帰りは後去りで足跡を落葉で消して去るのだ。「ふと」沢の方を見ると一米近くもあろうかと見えるミズ（ウワバミソウ）が生えている。ほかにも舞茸の木はあるのだが見廻る時間がない。空荷で帰るよりも「ミズ」採りにかかる。

このミズも季節を知らせてくれる。ハナイカダのように葉の上に花を乗せて秋には小さな実を結ぶ。この実を干して冬挿り鉢でトロロ汁を作ると、挿り粉木で挿り鉢が持ち上る程粘りが強いと同僚の小野祐二さんが教えてくれたものだ。私はまだ食べていないミズ採り終っても夕方五時には家に帰り着ける。

途中、「山葵」を採ったり道草を喰いながら帰る。台風の影響だろう

肌はシラスの真白に美しい岩肌を表している。郡界歩道の金兵衛沢辺りにもとの連絡船の無線の反射板があって、その沢を少し下るとこの滝がある。この沢を下ると青森の「自然休養林」になっている眺望山の高床式の山小屋風の管理事務所あたりになる。ここで白滝の沢は砂川と合流して奥内に出る。この沢は清流でイワナが大きな淵に大きな「イワナ」、その大ききの順に、イワナが棲んでいる。

この管理事務所から車道を上り坂ながら行くと郡界の自分の車に行き着ける。

そう思つて白滝沢の方に下りて見る。山の斜面はだんだん急になって来る。「待てよ」白滝は枝沢になる小沢でも一つ二つ滝があったりする。この暗闇では危険この上ないことだ。

引返すことにする。今度は急斜面を登るのだから下りの数倍の時間がかかる。顔を立木に衝突する迄見えない闇である。こんなとき煙草火でもかすかながらも明りが得られる次々煙草に火を移して歩く。

尾峰に上ると風は強くなるばかり、立木の折れる不気味な音を二度三度聞いた。

同じ道を行きつ戻りつ疲れると土の上でも草の上でもその場に坐つて休む。こんな時合羽ズボンが役立つ。煙草はついに品切れになってしまう。右に東郡の灯、左には北郡の灯が遠くにまたたいていて美しい。こんなにも灯が美しいと思つたのも初めてである。

尾嶺からは一族遠く秋とし

秋灯里は綺羅々の尾嶺に佇つ

やがて東の空が白み初め夜明けを迎えることになるがそんなに長い夜には思ひなかつた。

東からの風が強くなる。曲師沢の右股と左股の合峰あたりで木材運搬の新らしいブルの道になる。気に止めることもなくその道を行くと行き止りである。いぶかりながらも引返すしかない。

この道かなり後方にもどつて郡界歩道らしきを探して歩くのだがそんな道が他にもありその道に入つて見てもまた行き止りである。そんな道探しをしているうち日暮れも近くなつて来る。つるべ落しの秋の陽は暮色も濃くなつて来る。気はあせるばかり、月や星明りを期待したが、ついに暗闇になつてしまふ。

風はヤマセ風ながら冷たくない。『フクダ雲』もかからないし、蚊も出て来ない。ラジオは台風が能登半島から日本海に出て北上している様子を報じている。風が強いので焚火も出来ない。昔冬山であるが、マタギでさいこの山で避難死亡したと古老から聞いたものだ。山は真の闇になつてしまふ。

一句 山神の怒声闇より台風荒らし

坐つていたり横になると眠くなる性の私だから眠らないためには歩くことだ。先づ疲れないこと眠らないこと。これは山の鉄則だと思つてい。先づ杖を作ることにした杖の先を削つて先を尖らす。闇を歩いて道を外れると土がやわらかくて先が刺つて判るのだ。

道を失つた場所を本処地に行きつ戻りつ同じ道を何度歩いたことか。迷信だろうが夜中食べ物を持ち歩くと「けもの」が憑いて騙したりすると聞いているものだから。夜中残り二コのにぎり飯一コ食べ、一コは焼魚と出来るだけ遠く投げ捨てる。

ものゝ化が悪いのか道は背の夜寒

白滝の沢には細い滝ではあるがかなり高さの滝があつてこの一帯の岩

道筋も見えはじめて来る。パラパラ雨が降り出して来た。大きなリュックを背負っているから防水布の袋を頭に乗せていれば雨は防げるのだが道を探さなければとの思いから歩き続けたものだから腕から肩へとだんだん濡れて来る。それでも寒くはないので幸いした。

背中のラジオは絶えず台風情報を流している。

夜が明けきつてから音楽の様な音と人声ではないかと思われる物音を耳にした。耳を澄まして次の音を待たが再び物音を聞くことはなかつた。後で判つたことだが探すに来た人たちの笛の音と、叫んだ声ではなかつたかと。背中のラジオでかき消されたのではなかつたか。ラジオのつけっ放しは善し悪しである。歩くうち昨夜折れたであろう折れ傷も生々しく腐れの入った広葉樹が二本竝んで倒れていた。歩道の上り坂は

右折左折している、近道をとつて道を外して藪に入る。

山では突然何が起るか判らないものだ。藪を歩くうち雨の降る中蜂の羽音がする。気付いて見ると右手の軍手に黄色の大きな蜂が止っている。反射的に左手で叩く様に打ち落したら蜂は死んだものか何処かへ逃げ去つたものか姿は見られない。冷汗ものである。刺される体の場所が悪ければ山中でのこと死に至らないとは限らない。歩くうち蜂の巣に触れたのだらう。昆虫や動物の足跡など私はよく知らない。炭焼きの人等はよく知つてゐるものだ。心では冷静に冷静にと思つてはいても、頭の中はパニック状態になっている。数十年歩き馴れた山である。この地は営林局から来る「施業案」の立案者をも案内したことのある一帯だ。

道がなければなぜ「保護樹帯」の中を歩いて帰らなかつたのか。そのことに気付いたのは遅く、後の祭りである。

空沼から鹿の子水分水嶺になり昔の郡界歩道から五十米巾で「保護樹